2025年10月26日(日)
中国新聞SELECT掲載

JICAだより

ペルー
森脇実穂さん(28)
呉市出身

土壇場の対応力に学び

国際協力機構(JICA)海外協力隊員としてペルー・アンカシュ州政府の通商観光局観光課で働いている。同州は標高6千㍍を超える、世界一の標高にある国立公園のワスカラン国立公園をはじめ、トレッキング適地や遺跡、温泉など観光資源が豊富だ。こうした魅力を生かしつつ、観光客の増加や観光サービスの質向上を図るため、情報発信や受け入れ態勢の改善に取り組んでいる。

着任早々、ワラスの町は一年で最もにぎやかなカーニバルの季節を迎えていた。色鮮やかな衣装が街角を彩り、そこかしこに音楽と笑い声が響く。装飾された車と行進したり、音楽に合わせて踊り歩いたりするなど、テーマが異なるパレードが数日間繰り広げられる。私も会場設営や衣装の手配に携わり、水をかけあうパレードにも参加した。

スペイン語も現地文化の理解もまだ不十分な中、身ぶり手ぶりで動き回った。ぐれ、迎え入れられている喜びを感じた。

一方で日本との感覚の違いに驚くことも。会議やイベントは何でも開始予定から2時間遅れるのは当たり前で、参加者は文句も言わず談笑しながら待つ。準備も紙などにまとめず口頭中心で、当日に内容が変わることもある。足りない物はその場で調達し、臨機応変で人に頼りながら進めていく。日本のように綿密な計画はないが、土壇場での対応力と人のつながりの強さは学ぶ点が多いと感じた。

さて、前述したパレードだが、町中が色鮮やかな衣装や装飾品で華やぎ、各チームと行進する生バンドが何時間も演奏を続ける光景は圧巻だ。現状ではカーニバルの主役となる参加者は地元住民ばかりだが、彼らの熱気と彩りは観光資源として大きな可能性を秘めていると思う。同僚の協力を得ながら観光情報を発信するホームページの見直しを進める毎日。アンカシュ州ならではの魅力をより多くの人に伝えていきたい。

ワラスのカーニバルで同僚と行進する筆者(手前左から3人目)

歩いていると、他チームの人から「一緒に踊ろう」と誘われたり、写真を求められたり。寒くないかと気遣われて温かい飲み物ももらった。その温かさに緊張は次第にほ